タイ仏教社会の変動と宗教実践の再編
―― 宗教的原理主義の展開と世俗内倫理 ――

小野澤　正　喜*

The Social Change and Reformation of the Buddhist System in Thailand : Focusing on the Religious Fundamentalism and Secular Ethics

Masaki Onozawa

Abstract

In this paper, it is discussed the historical change in Buddhist system in Thailand. According to Max Weber, the world religions can be classified to two groups in terms of religious dogmas on salvation :

1) renouncement-oriented religions with strict and ascetic practices (Erlösung) :
2) merit-oriented religions with dependence to the supernatural powers of the deities (Soteriologie) :

At the beginning stage, Buddhism was one of the typical cases of the renouncement-oriented religions as is pointed out by M. Weber. However, in the process of expansion, Buddhism has absorbed various elements of merit-oriented religions ; as is observed in the formation of the Mahayana Buddhism. Nevertheless, Theravada Buddhism, in Sri Lanka, Thailand etc., attached to observe the authentic practices of the original Buddhism.

In Thailand, Buddhism has been the backbone of the national ideological system. The legitimacy of kingship or the secular political authorities is guaranteed by the maintenance of the monks' practices and the purity of the Sangha (Buddhist Ecclesiastical organization). Continuous efforts were paid by the state to control the Sangha for this purpose. At the historical turning points of Thailand, Thai state tried to make the drastic change in the Sangha to strengthen the national ideological integration.

From the middle of 19th century to early stage of 20th century, Thailand confronted the serious threat of its survival in the complicated international relations at the period. There was some possibility for Thailand to be fallen into the colonial status. Thai state tried to overcome this serious situation through the modernization of its bureaucratic organizations and military system. It also tried to reorganize the ideological system ; making the new combination of Buddhism and western sciences replacing the previous

＊育英短期大学現代コミュニケーション学科

combination of Buddhism and magico-religious beliefs. For this purpose, the state tried to expel the magical elements from Thai Buddhism and make the Sangha modernized and bureaucratic in top-down way.

From late 1980s, another drastic change is taking place in Thai ideology and Buddhism. By the rapid economic growth and industrialization in recent 30 years, the middle class population has been enormously increasing in the urban areas. It can be observed the bottom-up movement of the Buddhist renouncement-oriented reformation. It involves the wide range of secular believers as well as the monks. The Santi-Asoke movement and the Thammakaya movement are the typical samples. Those movements may be regarded as the important symptoms of the further transformation of Thai Buddhism.

Keywords : Theravada Buddhism, Religious salvation, Secular ethical system, State and ideology, Kingship

キーワード：上座部仏教，宗教的救済，世俗内倫理，国家とイデオロギー，王権制

Ⅰ．仏教に内在する反秩序と世俗内論理
　1．M. ウェーバーの提起した問題
　2．原始仏教
Ⅱ．上座部仏教におけるサンガ浄化の必然性
　1．サンガー解脱志向の実践の中核
　2．功徳志向の実践と福田思想
Ⅲ．タイの仏教的原理主義運動の第１類型：トップ・ダウンの宗教改革
Ⅳ．タイの仏教的原理主義運動の第２類型：ボトム・アップの宗教改革運動

Ⅰ．仏教に内在する反秩序と世俗内倫理

1．M. ウェーバーの提起した問題

上座部仏教の問題をはじめて社会学的研究の俎上にのせたのはM. ウェーバーである。プロテスタンティズムの世俗内倫理の比較対照物を中国、インドをはじめとする諸宗教に求めたウェーバーは、宗教の類型化をするにあたって次のような宗教実践の区別を行っている。

Erlösung：主知的、合理的な了解に裏付けられた世俗内的禁欲実践による宗教的救済のあり方。ユダヤ教、プロテスタンティズムにおける救済を典型とする。以下本稿では「合理的禁欲型救済」と呼ぶ。

Soteriologie：宗教の大衆化に伴って引き起こされる救済者恩寵、呪術的な秘跡恩寵等の救済財の配分を伴う宗教的救済のあり方。

①聖者、英雄、機能神等への崇拝、②情緒的要素を伴う大衆的祭祀、③大衆教化のための神話等の形成を伴う。

オリエントの宗教の殆どはこのタイプの救済と結びついているという。キリスト教にもキリスト祭祀、聖者崇拝の形で流入しているが、プロテスタンティズムによって放逐されたという。以下本稿では「神秘主義的恩寵型救済」と呼ぶ。

古代インドにおいてアーリアの侵入に始まるインド社会の再編によってカースト・ヴァルナ制が生み出されていった。その頂点に立つバラモン階

層による儀礼の体系はウェーバーによれば「神秘主義的恩寵型救済」の典型例である。しかしインド社会では古くからヨーガ修業者による禁欲的修業や、四住期[1]の実践が広く行われ自己鍛練を通じた自己浄化――悟り（解脱）への到達を志向する流れがあった。ウェーバーはこの流れに与する原始仏教、ジャイナ教を「合理的禁欲型救済」の例として位置付けている。ウェーバーはインドにおいて起源前5－6世紀を、バラモン階層の支配体制が揺らいだ時代と捉えている。それはバラモン階層の宗教的支配を打ち破って「合理的禁欲型救済」をかかげる諸宗教（六師外道、仏教、ジャイナ教）が台頭した時代である。又彼らの社会的基盤は生産力の上昇を基礎にした商業交易関係の活発化を背景に成立した都市群とそこを拠点にした相対的に下位のカースト集団（クシャトリア、商業分野のヴァイシャ）にあるとしている。

こうした新興思想の一つとして形成された仏教は、バラモン教の三つの柱であるヴェーダ、祭祀儀礼、ブラフマン的社会制度（カースト）の権威をすべて否定し、個人の人格を出発点とする新しい秩序を提唱した。

ウパニシャッド哲学以来、バラモン的宗教体系の中に伏在していたこの解脱への志向性は、バラモン司祭がとり行う祭祀によって神格の恩寵を媒介しようとする「神秘主義的恩寵型救済」に基くバラモン体系とは矛盾する側面をもっていた。神的な存在は輪廻界の存在であり、その恩寵は輪廻界でのみ意味をもつものである。それに対して輪廻界を超出しようとする解脱行為は神の恩寵に対する対抗的価値を志向することになる。仏教以前のインド社会でバラモン階層以外においても四住期(アシュラマ)の移行が規範化していたこと―つまりその第3期の林住期、第4期の遊行期に俗世からの解脱をめざした生活に入っていたこと―を考慮すれば、この矛盾は古代インド社会のイデオロギー体系が内在させていた亀裂として古くから意識化されていたものと思われる。しかしこうした対抗的価値の表出は社会的基盤に亀裂が生じた時代においてのみ社会的な意義をもった。

農村的社会が商工業を基礎においた社会に変質する時代、新たな経済的、政治的な力をもって台頭した勢力にとって、こうした価値の転換は、それが世襲的身分秩序を否定し、獲得的な宗教的秩序の形成を促す点においてより好ましいものであったはずである。つまり旧来の秩序ではバラモン階層は生まれながらにして清浄であるとされ、神々への排他的な接近が許され、「神秘主義的恩寵型救済」の媒介者であった。ウパニシャッド哲学の知識も彼らが独占的に所有し続けていた。しかし新たに台頭しつつあった価値は、この世=輪廻界の秩序を否定したものを強く志向していた。輪廻界からの脱却の営みにおいて、生得的な地位や輪廻界における清浄さの多少はすべて相対化されトータルに否定されるべきものとなった。

2．原始仏教

仏教はシャカ族の王子として生まれたゴータマ・シダッタによって創始された。彼は29才で出家し6年間の苦行の末に悟りを開き、その後の45年間階層の区別を問わず布教教化に努め初期仏教教団をつくりあげた。その教義によるとこの世界は五落（パンチャ・カンダ：5つの集合）からなっているとされる。五落とは色(ルーパ；物質)、受（ヴェーダナー；感覚活動)、想(サンニャー；構想活動)、行（サンカーラ；意志的活動)、識（認識・判断活動）であり、「我」といったものもこの五落の一瞬一瞬の結合によってなりたつものであり、常に変動を続けている。仏教思想の根底にある四諦説によれば、この世に存在するものは全て苦をもたらすものであるという。我々をとりまく世界は転変してやまない輪廻の中にあるとされ、その世界では、苦しみや怒り、病苦や死、別離の悲しみ等々の苦が不断に生じている。この苦を生みだす原因は、つきつめれば、人々のもつ執着である。執着がある限り、人は輪廻界のとりこであ

り、次々に生死転生を続けながら永久に苦悩を味わい続ける。この苦悩の連鎖からの脱却すなわち解脱への道は、「八正道」を行うこと、つまり「正しい見解」を持ち、「正しい思惟」をし、「正しいことば」をつかい、「正しい行い」をし、「正しい生活」を送り、「正しい努力」をし、「正しい意識」をもち、「正しい瞑想」を行うことによって開かれるという。そのためには僧侶になり戒律の遵守、瞑想、智慧の修養等の実践が必要になるという。

こうした仏教をはじめとする新興宗派に共通する点は下記の通りであった。

まず第１に、バラモン階層が他のヴァルナ（バラモン的階層秩序における四つの階層）に対して支配的な地位に立ち、儀礼によって神の独占的な接近を行っている体制を打破したことである。新たに台頭した宗教運動は生得的な地位ではなく、ヴァルナを問わない個人の自由な沙門（僧侶）身分の獲得を通して解脱をめざす宗教的な階梯を創出した。ここでは宗教者集団における民主化がなされている。第２に、新たな宗教運動は神・呪力への依存を否定し、個人による自己抑制・禁欲と知的・合理的な修業を通して業の浄化、救済に達するという営為を行うことに力点がおかれる。つまり個人的実体であるアートマンの浄化・解脱を求める実践が主たる課題として提示される。このことによってバラモン教の「神秘主義的恩寵型救済」は新宗教における「合理的禁欲型救済」論へと転轍されている。

〈新興の王権にとっての新興宗教〉

台頭しつつあった王権とヴァイシャ階層にとって、次の２つの理由から新興宗教は魅力的であった。

まず第１に、既成のバラモン教の体系は各社会階層ごとにダルマを設定しており、クシャトリアやヴァイシャの階層にとって自ら神的なものに接することも、また解脱への営為を行うことも制限されていた。宗教的エリートであるバラモン階層が精神界を支配しており、他の階層は道具的な存在になっていたのである。「神秘主義的恩寵型救済」論から「合理的禁欲型救済」論への転轍、アートマンの浄化の達成という目標の設定は、彼らに宗教的実践に主体的に参画するチャンスを与えた。更に、アートマンのあり方を問う新たな問題設定は、世俗的生活全般を主体的に自己規定していくことと相即的な関係にあり、激動期の新興階層であるかれらの望んでいた世俗内倫理の確立に直結するものであった。

第２に、王権をになうクシャトリアにとって生得的、世襲的な特権階層であるバラモン層に代わって任意加入の僧侶集団が形成されるということは、政治的な便宜を与えるものであった。まず、国家規模の拡大にともなって領域内には多様な宗教集団を内包させることになった。同じバラモン教の中でも主たる神格は様々であり、さらに土着的な神格、精霊との結合形態は多様であったはずである。つまり、各地方共同体は、土着的な信仰体系を固持する閉鎖的な一体性を保っていた。この信仰体系の面での自足・閉鎖性は、国家統一をめざすクシャトリア、経済活動の自由な発展をめざす商業分野のヴァイシャにとっては打破すべき障害であった。そのための手段、即ち伝統的な信仰体系を破砕し、一元的な信仰体系に組み込む枠組みを提供したものこそは仏教、ジャイナ教等の教理体系であり、任意加入の僧侶集団であった。

仏教において任意加入でありながらも閉鎖的、自足的なサンガ（僧侶組織）が結成されたことは政治的には特別な意味をもっていた。サンガの成員権が獲得的なものである以上支持・禁止規定等による外部からの統制は容易であった。更に彼らは俗人集団に対する「神秘主義的恩寵型救済」の救済財の媒介者ではない。(少なくとも発足の当初においてはそう言えた。）脱/超世俗的な営みを通じて俗人に対する模範を示すに止まる、政治や政争に対して関与することのない集団である。こうしてサンガはクシャトリアにとって有用であり、かつ無害な存在であった。これを支持することに

よって、クシャトリアは全体社会に対して従来以上の政治的正統性を獲得することができる。それは各共同体にサンガのネットワークが張りめぐらされる程度に応じてより強力なイデオロギー装置として機能していく。

上記のような理由から新宗教集団は既存のバラモン―クシャトリア関係の再編に力を持つことになった。多くの新興国家が仏教を国教とするようになったが、その中で王権とサンガの関係に関するイデオロギーも整備されていった。仏教において理想的な王とされているマウリア王朝のアショーカ王はインド亜大陸を統一したが、国家支配のイデオロギー的支柱として仏教をすえた。仏教でいう「転輪聖王」（チャクラバティ）の理想がかれにおいて実現したとされる。

〈原始仏教がかかえていた脆弱性〉

しかし、こうした「合理的禁欲型救済」論として台頭した仏教は、発生の原点において「神秘主義的恩寵型救済」を否定したため、そのままでは大衆的基礎の欠落が招来される要因を内包させていた。大衆の求める「神秘主義的恩寵型救済」を否定し、ひたすら解脱を求める宗教的エリートの宗教実践はなんらかの集団からの経済的な援助を得なければ存続しえない。実際には初期仏教サンガ（僧侶組織）が、クシャトリア、ヴァイシャ出身者で占められていた事情もあり、王権（クシャトリア）による国家的保護や富裕なヴァイシャ階層による経済的支援が保証されていた。後には寄進された資産によってサンガ自体の荘園領主化が進んだと見られている。

こうしたサンガの高踏的、貴族的ありかたは、アジア的な社会環境の中で、大衆的要求の高まり―すなわち「神秘主義的恩寵型救済」を求める在家衆生の圧力の中で変質を迫られる。原始仏教集団の中に胚胎した大衆部の運動にはじまり、最終的に大乗仏教を生み出していった。

II．上座部仏教におけるサンガ浄化の必然性

上座部仏教はタイ社会において既に800年近くの歴史を持っている。その間に上座部仏教とバラモン的な要素や村落レベルのアニミズム（精霊崇拝の信仰体系）との習合が進み、また王権との相互依存関係を強めてきた。しかし、そうした複合形態に進む前に、タイにおける上座部仏教それ自体がどのような要素から構成されているのかについて本章で検討していこう。

1．サンガ―解脱志向の実践の中核

タイ仏教の、正統教義の体系は次のように解脱をめざすサンガを中心に組まれている。

原始仏教の原型を比較的よく残しているとされる南方上座部仏教では、宗教活動の中心に位置しているのは、僧侶（プラソン）の集団であるサンガである。大衆の救済を重視する大乗仏教とは対照的に、上座部仏教では修道僧の自力による解脱（ニッパーン）の達成に重点がおかれている。超自然力への依存や、神に対する祈りは全く排除されていて、焦点は仏教的世界観の理解と、その理解に基づいた実践によって自ら悟りを開いていくことが強調されている。一切の神秘的要素を排除している点で「合理主義的」であり、また、個人の内面の悟りを強調している点で「個人主義的」でもある。さらに、正覚をさまたげる煩悩の生起を断つことを目的に227の戒律によって行動の一つ一つが縛られている点に注目すれば、「戒律主義的」ということもできる。このような実践を可能にするために、タイの僧はサンガなる組織体を国家的規模で構成している。サンガの中央集権化が進んだ結果、現在では上記の宗教実践は、国家的サンガに属した者にだけ許される特権になっている。得度の儀礼を行ってこのサンガに僧として加入することができるのは、成人男子に限られている。未成年者には、十戒を授けられてネーン（ま

たはサーマネーン）と呼ばれるサンガの準成員になる道が用意されているが、女性のサンガへの加入の道は、組織的に鎖されている。ところが、サンガの成員になった者は一切の世俗的な仕事から隔離されなければならないと規定する戒律によって、たとえば田畑を耕すといった基本的生産活動を営むことも禁止されている。このためサンガはそれ自体では経済的に自立できないことになり、衣食住全般にわたって在家者の社会に依存する必要に迫られる。一方で超世俗的な実践を通してのみ解脱が可能になるとして、世俗的価値をすべて否定し､エリート主義的な宗教生活を営みながら、他方で、物質的には在家者社会に依存するという原始仏教に見られた矛盾をタイ・サンガに典型的に見ることができる。

一方サンガ内の解脱志向の実践自体は、その達成の程度が計量困難なものであるため、形式的な戒律主義が帰結されている。王権によるサンガ介入は形式的な諸点をめぐって行われてきている。結果としてサンガ内の実践自体が形式化されてきた。それによってもたらされたサンガ自体の空洞化、無力化を押しとどめサンガを再活性化させるためには、周期的な森林派サンガ等の力の注入が必要であった。

２．功徳志向の実践と福田思想

解脱志向の仏教教義は、サンガに属す僧という宗教的エリートを対象に用意された説明原理であって、在家の仏教徒に対しては別な原理が行動の指針を与えている。輪廻転生の秩序からの脱却を一度断念して仏教の説く世界を見なおしてみると、輪廻界に対する肯定的な解釈が可能になる。つまり、輪廻界の生全てを苦と考えて否定するのではなく、その秩序のなかに区別がある、という風に捉え直してみれば、次に転生（再生）する時にこの秩序体系の中で、できるだけ好ましい地位に生まれることを、在家者の宗教実践の目標に据えることが可能になる。こうした来世への願望に対応して、バラモン教や原始仏教に内在していたカム（業）の思想が拡大解釈され、体系化されている。

それによれば、人のこの世における地位や運・不運は、その人のもつカム(業)、つまり、その人が前世で行った行為の結果として決定されているとされる。カムを決める主たる要因は、その人の積んだブンつまり善徳の多寡である。前世でタンブン（善徳のある行いをすること）を多く行った者は、多くのブンを持ち、現世で幸せな生活を送ることができるとされる。それに対して、前世でタンブンをあまり行わなかった者はブンも少なく、現世で幸せを享受することはできない。一方ブンの反対概念は、バープ（悪業）つまりブンを減殺する悪行であり、生物を殺傷したり、盗みをはたらいたりするとバープになると考えられている。したがって、人のカムは個々人のブンとバープのバランスによって変動するとされている。前世→現世、現世→来世というカムの因果の連鎖の説明は、現実には更に拡大されている。現世の生活の中で積んだブンとバープの結果、現世の将来の生活における運・不運、幸・不幸も決定されると理解されている。この説明原理が、タイの世俗社会に深く浸透しているため、人々は日々の行動を、ブンまたはバープの尺度で計りながら営んでいる。

上記の体系で注目されることはバープの観念である。多くの世界宗教において、戒律や社会規範にもとる行為の僅かの現れは、蓄積した善徳のすべてを根底から無効にしてしまうものとされるが、インド思想の中の業観念では一般にバープの贖罪が単なる功徳の蓄積によってなされるとされる。従ってバラモン―仏教体系では罪の意識を存在の根源にまで掘り下げる意識は希薄であり、上記したように人の業は悪行と善行のバランス計算で時々刻々変動するものとされる。そうした不安定な業の担い手としてのアートマン観念を軸においたインド的コスモロジーは、こうした希薄な罪

意識を前提にして初めて可能になっている。注目しなければならないのは、寺院の新改築への貢献、僧への食物の布施、金品の寄進といったサンガの維持に向けられた行為が高いブンを生みだすものとして意識されていることである。サンガはタイ語でナー・ブン、つまりブンをうみだす田（福田）と呼ばれるが、同じ経済的支出を行った場合、サンガに対して行われた支出は最も大きなブンを生みだすとされている。この福田思想の根幹は、サンガ組織全体の維持にある。サンガが組織体としての神聖性を失った時には、上記の体系は根拠をなくすということでもある。サンガが厳格性、純粋性を保つかどうかは福田思想、ひいてはタンブン志向の仏教体系の存続にかかわる重大問題である。そのため、サンガ内部では厳しい戒律の遵守が求められ、違反者は容赦なく追放されている。また、組織と教義の純粋性と質を保つために、国家権力による様々な統制が行われている。この事情が次節で見るように王権によるサンガへの介入を正統化し、それを王権の正統化イデオロギーの根幹に据えさせる根拠となっている。

Ⅲ．タイの仏教的原理主義運動の第１類型―トップ・ダウンの宗教改革

タイ社会におけるサンガと王権の関係は基本構造においてヒンズー社会におけるバラモンと王権（クシャトリア）の関係と並行的である。つまり国王は在家仏教徒の力を結集して仏教コミュニティの聖域であるサンガを支援し外敵から防衛する。そのことを通じて仏法（ダルマ；サンガの中で口承伝承される）の維持が可能となり、その行為によって王権自体の正統化が図られる。

歴代のタイ王権が行ってきたサンガ強化の運動は上からの原理主義的改革運動の装いをとることが多かった。仏教の原点への回帰の運動である以上、内面性、「合理的禁欲型救済」の側面の強調がなされた。しかし、それが上からの権力秩序を目的になされたものである以上、最終的に結果されたものは「神秘主義的恩寵型救済」を軸とする伝統秩序の強化でしかなかった。19世紀中葉のタマユット・ニカイという新宗派の成立を含む過程はタイの近代化の推進と植民地化の危機が背中合せに存在した時期であり、上記の過程が最も典型的に見られた。タマユット派は1835年以後のラーマ４世モンクット王により始められ、1881年に宗派として公認されたが、それは次の様な背景の中で進んだ。

19世紀中葉から20世紀の第１四半紀にかけて、世界の歴史は、列強間の力関係のたえまない変動、植民地の再分割、民族運動の高揚、民族国家の形成などを含む激動の時代をむかえる。百数十年の孤立を保ってきたタイも、好むと好まざるとにかかわらず、国際社会の中にまきこまれてゆき、その中で主体性を確立してゆかなければならなかった。

第１に、19世紀初めまで、不断の抗争の相手国であったビルマ、カンボジア、ヴェトナム、ラオスは次々と列強の手におちてゆき、今までのような戦闘はなくなったものの、今度は列強の力ともろに直面しなければならなくなった。アジアの大国、インド、中国などをも陥れている西欧列強の脅威を前にして、いかにして国家の独立を維持していくかは、この時期この国の支配層の第一義的な課題となった。

第２に、ボウリング条約締結（1855）後の諸外国との条約によって、国内経済体制は激変した。スエズ運河開通の効果とも相侯って、タイは米輸出国として国際的な分業体系の枠内に組みこまれた。それまでほとんど荒蕪地であったチャオプラヤ・デルタの開発が近代技術を使った灌漑工事によって大規模にすすめられ、米の搬出のために運河、道路、鉄道の交通網が整えられていった。この過程は、商品経済の拡大、安価な労働力としての中国人移民の大量導入、税制の金納化、中国人による徴税請負制などを随伴させながら進行し

た。条約によって関税自主権を失い、貿易の自由化で、王室は朝貢貿易の独占による収益を失ったものの、米の輸出と、それに伴う経済発展、税収の増大で近代化を推進してゆくための財源を確保した。

第3に、西欧思想及び、近代科学の知識と技術が流入したことによって、伝統的なイデオロギーの体系は危機にさらされることになった。しかし、新たに開かれた印刷技術、交通網を含むコミュニケーション手段の拡大は、それまで不可能だったイデオロギー体系の構築を可能にするものでもあった。タイ王権は、ラーマ4世モンクット王（1851-68）の時以来、新状況に対応すべく政治体制とイデオロギー体系の全面的改革にのりだす。

まず厳しい外圧に抗しつつ、全般的な改革を行うためには、国内の行政体制を機能化、効率化する必要があった。この面で当時の為政者がとった道は、従来の家産制官吏体制を西欧的な行政技術にもとづく近代的官僚機構に再編することであった。ラーマ4世の治世とラーマ5世チュラロンコーン王（1868-1910）が幼少のため政治を摂政にたよっていた時期（1868-73）は、こうした構造変化を思想的に準備した時期として位置づけられる。この時期、王権は宮廷内保守勢力を抑えつつ、条約締結で全面的開国を行う一方、印刷所の設置、外人顧問の大量雇用などで、西欧の知識、技術の摂取に努めた。

次いで、ラーマ5世は、1873年実権を握ると、新しい機能を担った新行政部局を次々と設置し、旧制度と競合させながら、1892年にはじまる全面的改革への準備をすすめた。1874年にはチェンマイ総督府を設置して、従来朝貢国だった北タイを直轄統治下におさめ、引き続いて地方行政の抜本的強化にのりだした。又、1875年には、財務開発局を設置して、新税法施行の布石とした。同年電報局、1881年には郵政局が設置された。1885年には、調査局をもうけ、西欧人技師の下でタイ人の測量技師を養成した。

彼らは後に電報、鉄道の敷設の調査活動に従事すると共に、国境線・県境線の調査・確定、土地登録のための測量などでもその技術を発揮した。1885年には、外務局を設け、留学経験者等を抜擢して従来の中央庁の機能を奪っている。教育面では、1887年、社会教育局を設け、それを核に1889年には教育省を設置した。従来の官吏は俸給をうけとらず、役得上の収入を得る方式に従っていたが、1874年以後きまった俸給を現金で支給され、一定の勤務時間を規定される方式に移行していった。こうした準備の後、1892年にはじまり、1890年代を通して行われた行政組織の全面的改編は「革命的」といえるものであった。こうした組織替えにより、それまで各部局に未分化な形で分散していた各種機能が、機能的に編成された新しい省庁の下に統合され、一括掌握されることになった。たとえば地方行政機能は新内務省に、国防機能は防衛省に、外交機能は外務省に、財務機能は財務省に、司法機能は新設の法務省にという具合に機能が分化され、各機能を担う官僚の権限を規定する法律体系も整備されていった。これらのポストは留学経験者、王立学校（1878年設置）、王立高等教育機関（1883年設立）の卒業生などの王族、貴族の子弟で埋められたが、学校教育制度の充実に伴って一般国民からの登用の割合が増大した。

かくして、タイ国家は「近代官僚制」のあらゆる指標からみて、完備した官僚機構を持ったといえる。行政機構の改編に対応して、イデオロギー体系の主柱、仏教をめぐる分野にはどのような変化がもたらされたであろうか。仏教は、滔々たる西欧思想の流入の前に、基盤をゆるがされていったであろうか？　この点についてのラーマ4世、5世等の王権の基本的戦略は「泰魂洋才」をもって新たなイデオロギー体系を構築することだったようにみえる。即ち、イデオロギー体系の枠組としての仏教とサンガはあくまでも堅持し、一方その下位体系として近代科学の知識と技術を大胆に取り入れて近代化をおしすすめるという方針、言

いかえれば、タイ人の中に伝統的に確立していた仏教―バラモン教―アニミズムの結合を、仏教―近代科学と西欧思想の結合で置き換えるという方針であったように考えられる。仏教の宏大な思想体系は、近代科学及び西欧思想と両立しうる、というのがラーマ４世の信念であった。しかし、それを実現するためには、仏教教義とサンガが、十分に純粋であり、首尾一貫しており、統制されている必要があった。この方針にそって、既にラーマ３世の治世下から仏教原典に忠実な実践と信仰へ復帰をめざす宗教改革を起こし、後のタマユット派サンガの基礎をすえている。王即位後は、サンガへの統制を強めるため各種のサンガ法を発したが、中でも「僧、サマネーラ、ルーク・シットに関する法令」では、違法行為を働いた僧への厳罰を規定すると共に、寺境内居住者全員の登録の義務づけ、僧侶と見習僧についての保証人規定、サマネーラの年齢制限（25～70才の者が見習僧になることを禁止）など労働力政策ともみられる統制を行っている。又、王族出身の僧に、サンガの位階を与える制度をつくり、王権によるサンガへの介入を強めた。ラーマ４世の中では近代化志向と伝統志向が折衷されているという意味で、「新伝統主義」（neotraditionalism）という規定が与えられているが、彼における「伝統」とは、近代化推進の枠組みとなりうるように選択、洗練されたものであり、すぐれて改革的志向をもっていたことに注目しなければならない。

こうしたラーマ４世の遺志を受け継いだラーマ５世は、その方針の大規模な実現をすすめていく。サンガの統制と拡大強化によって、仏教の普及と質の向上をめざすと同時に、学校教育制度によって下位体系としての科学知識を普及させようとしたことがそれである。

これらの諸課題をすすめるため、ラーマ５世は、北タイ、東北タイなど、今まで未組織になっていた地方も含むすべての地方の仏僧を単一の体系の中に組みこむことを企てた。1902年「ラタナコーシン暦121サンガ統治法」が発布されたが、これによって当時７千以上を数えた全国の寺は、一元的組織体系の中に位置づけられ、地方区長以上は勅任とされた。従来のサンガの体系では、百余りの最重要の「王立寺院」だけが組織されていたにすぎないが、この制度の確立によって私立寺院や、授戒壇をもたない小寺をふくむすべての寺が体系の中に位置づけを完了した。更に、この「統治法」を補完する目的で、政府の手により法律、布告、省令、通達の体系が整備され、又、その細目規定はサンガ自体によって定められていった。これによってサンガ自体の「官僚制化」が進んだ。ラーマ６世の時代には教理教科書の刊行、試験制度の整備、扇によって示される位階制の整備などが行われ、この傾向は更に強められた。

こうして強化されたサンガは、地方行政の整備の上に、北部、東北部などの異派セクトの克服にのりだした。何度かの抵抗にあい妥協しながらも、近代教育制度の普及にたすけられて漸次この課題は達成されていった。近代民族国家の形成期を通して、仏教は政策的に、近代科学を下位体系とする思想的結合物に枠組を提供させられている。

この仏教―バラモン教―アニミズムの結合形態から、仏教―近代科学の結合形態への移行は、近代教育制度の拡充によって加速されつつも、漸次的に進行してったと思われる。この過程で、仏教自体の世界観的首尾一貫性の強化や、サンガの官僚制化などの変化が進んだことが認められる。

Ⅳ．タイの仏教的原理主義運動の第２類型：ボトム・アップの宗教改革運動

１）物質主義的方向への変化

近年のタイ社会の変動によって、タイ仏教に大きな変化がもたらされている。かつて典型的な農業国であったタイは、1960年代から急速な近代化をとげた。その中でサンガと政治や社会開発の関係が問われるようになった。さらに1985年のプラ

ザ合意以後は輸出志向の工業化が進むが、都市人口が急増し、在家仏教徒が仏教に求めるものも変化した。一方で仏教の世俗化が強まるとともに、他方では仏教を根本から改革しようとする動きが活発になった。以下多方面に進んでいった仏教の新展開を検討しよう。

まず、社会変化の中での不安をかかえ、経済的な私的利益の追求が強まる中で、仏教によって物質主義的な願望を達成しようとする方向も強まり、呪術志向の仏教の増殖が見られる。刺青、小仏像、願掛けといった従来からタイ仏教に内在していた呪術的要素は近代化の中で、特に都市市民の中で広く受け止められるようになっている。そうした中で仏教的な呪力が凝集した小仏像が高額商品として取り引きされるような現象が見られるようになっている。バンコク市内には小仏像を中心としたマーケットが成立し、高僧が制作した希少性のある小仏像は高額で取り引きされている等の商業主義による宗教の利用といった現象が一方の極に見られる。

2）仏教の社会運動への関与を経由した精神主義的、原理主義的方向への深化

タイ経済の発展の中で、1980年代以後都市化が進み、都市の新中間層と労働者は厚みを増してきているが、そうした新しい都市住民を基礎にして、仏教の物質主義化の方向とは逆の流れ、つまり精神主義的な純化と仏教の原点への回帰の運動が起きている。

この動きは2つの段階を踏んで進んでいる。まず第1の動きは1960年代以後の開発独裁体制の総決算となった1973年から1976年の変化である。学生や都市市民の中で高まった政治変革の運動に対応して、サンガ組織自体が社会開発や少数民族の教化への関与（タンマチャリク運動）を開始し、僧侶の一部が保守と革新に分裂しながら政治運動への関与を強めていった。1973年、タイは長期の軍事政権の支配体制を廃し、文民政権を成立させたが、学生や進歩勢力が主張した社会的公正の原理は多分に仏教的色彩を帯びたものであり、仏僧の一部は政治運動への参加や、社会開発の先頭に立っていった。1976年、軍を中心としたクーデターによって民主化は挫折するが、この過程で注目されたのは村落スカウトという農村の若年層に基礎をおいた組織の活躍であり、ナワポン、カティンデーン等の行動組織が多数結成された。それら組織の精神的支柱となったのはキティウトー等の僧侶であった。かれらは「政治参加によって多くの仏教的功徳が生みだされる。」などと人々を扇動した。従来、僧侶集団は政治勢力の消長には関与せず、政治的立場を越えた安定装置であったが、僧侶の政治化の動きはそうした伝統からの逸脱であった。

さらに1980年代の都市中間層の急増の中で、第2段階のより本質的な変化が見られるようになる。近代化する都市の中で世俗的な生活を行いながら、仏教本来の生活のあり方を求めていこうとする人々が増加し、いくつかの新興の仏教集団がそれを組織化し、さらに情報革命が進む中で国際化を目指している等の変化である。

そうした仏教的原理主義の原点となっているのは故プッタタート師[(2)]である。彼は、多くの著作の中で、仏教経典のユニークな解釈を示し、人間仏陀の宗教的な達成と心理的変化という視点から、解脱への道筋に抜本的な再検討を迫っている。またスワンモークという修行道場を構えて多くの後進の指導にあたった。

新しい運動の中でも最も尖鋭にサンガのあり方の再検討を迫ったのが、サンティアソーク（憂いなき平安）運動[(3)]である。在家仏教徒に対して戒律遵守の禁欲的生活と修行を勧め、女性に対しても解脱を志向する実践を求めている点が特徴である。ここでは従来のサンガと在家社会の相互補完的な関係を否定する方向が典型的に見られる。サンティアソークは自ら得度式を組織し、僧侶を生みだすというサンガの逆鱗にふれる行動に走ったため、1991年には司法処分を受けている。

新しい運動のもう一方の旗手は、タンマカーイ運動[4]であり、この集団は在家仏教徒に対して瞑想を主とする日常的な修行を勧め、女性に対しても瞑想を通じて宗教的な達成を追求する可能性を指し示している点が特徴である。この集団でも従来のサンガと在家社会の相互補完的な関係を否定する方向が見られ、各種メディアを活用しながら遠隔地、特に海外に対しても情報と新教義を発信している。このグループに対してもサンガ本部は重大な疑念を示し、ここ数年宗教裁判の闘争が続いている。

これらの新興の仏教的改革運動は、在家の仏教徒に八戒や十戒に則った生活を送るよう呼びかけている。いずれも都市部の中間層や上層階層を基盤にしながら、仏教実践における原始仏教への回帰を志向し、瞑想や禁欲的な生活スタイルを追求している。

これらの運動はプッタタート師による仏典の新解釈を基礎においているが、いずれも仏教の物質化・形骸化に抗して仏教の原点への回帰を志向している。これは周期的にタイ・サンガにおいて発生した「合理的禁欲型救済」に回帰する連動の一つの現れとみることもできる。しかし伝統的に見られた諸運動と比較して根本的な違いが存在する。それは新たな運動の担い手の主力が台頭しつつある都市中間層である点である。従って、権力秩序を維持しようとする意図が働いていないという点が注目される。従来の運動で見られた、「神秘主義的恩寵型救済」との妥協や官僚制化への動きは見られない。勿論、物質主義化を主たる側面とする近代化・社会開発過程で見られる仏教運動の様々な分派は、「神秘主推的恩寵型救済」を旨とする物質主義的翼を派生させているが、それは「合理的禁欲型救済」の動きをとどめるものとなってはいない。このように同時平行的に様々な分派が発生していることが現在の特徴である。その中で国家的なものに統合しようとする意図の不在が「合理的禁欲型救済」派の惰性態への転落を阻止しているといった新たな兆候が見られる。

こうした新たな動きはいくつかの新たな含意をもっている。まず伝統的な聖俗（僧侶と俗人）の区別が相対化されることを通じて、世俗内仏教倫理の本格的な確立にむけた運動がタイ仏教史上初めて登場したことになるが近代化の更なる進行の中でその含意は重要である。

ところで仏教的な聖俗の区別の否定は、女性の劣位の否定と密接に関係している。これらの運動の中で女性は受動的・間接的な形の功徳の追求にとどまらず、自ら宗教体験の主体になっている。いずれの運動も女性に対して僧侶的な位置を認めるところまではいっていないが、女性による「獲得的な清浄性」の追求は推奨している。そうした実践への参加は都市部の学生、ホワイトカラー層の女性において顕著である。

上記の動きに対してサンガおよび国家は、僧侶の行為や身分にかかわる点を問題にしつつ規制の方向を強めている（サンティアソーク運動に対する身分僭称、戒律違反の追求等）。これらの運動によってサンガ中枢に直ちに大きな動揺が生じているとはいえないが、長期的にみた場合、これらの動きは社会的な価値観の変化につながっていく可能性がある。サンガ内の若年層の僧侶に「獲得的な清浄性」への新たな指向性が強まれば早晩実践や教義解釈の再検討に進んでいくと思われる。更に重要なのは在家仏教徒レベルにおける功徳志向の実践から在俗の「獲得的な清浄性」追求実践への移行が一定の社会層を巻き込んで進んだ場合、功徳志向の実践によって体系づけられていた全ての価値観がトータルに問い直されることになる。そうした過程で女性という「俗またはけがれの極」は根底的に問い直され、消滅または縮小に向かう可能性があると考えられる。

注

(1)　インドのヒンドゥー社会において、再生族の男子が経過すべきとされる人生の区分（āsrama）のこと。学生期、

家住期、林住期、遊行期からなり、森林に隠遁して修行する林住期と乞食遊行する遊行期において現世的関わりからの脱却が追求される。

(2) プラ・プッタタート師（1906-1993年）は既存の仏教教理体系を批判し、原始仏教の教理と実践を復興させようとする試みを展開した。多くの著作により影響力を及ぼしたのみならず、スワンモーク寺院において修行のあり方の範例を示し続けた。

(3) ポーティラック師によって創設された改革派仏教運動組織。禁欲的な修行者のコミュニティーを構成し、禁欲的修行のあり方を提示した。この運動の影響下にパランタム（道義）党が結成され、一時政治改革運動が展開された。ポーティラックがサンガから強制還俗処分に遭うなどの抑圧を受けている。

(4) 故モンコンテープムニー師によって創設された改革派仏教運動。タンマカーイ寺に本拠地を置き、瞑想を重視する宗教実践を提唱している。世界各地に支部をもち、インターネット等を活用した普及活動を展開している。

参考文献

石井米雄：1975 『上座部仏教の政治社会学』創文社。

田辺繁治編著：『実践宗教の人類学上座部仏教の世界』京大学術出版会。

森部　一：1998『タイの上座仏教と社会―文化人類学的考察』（南山大学学術叢書）山喜房佛書林。

矢野秀武：2006『現代タイにおける仏教運動―タンマガーイ式瞑想とタイ社会の変容』東信堂。

Jackson, P.: 1989 *Buddhism. Legitimation, and Conflict: The Political Functions of Urban Thai Buddhism*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Keyes, C. F.: 1978 "Political Crisis and Militant Buddhism in Contemporary Thailand", B. L. Smith (ed.), *Religion and Legitimation of Power in Thailand, Laos, and Burma*, Chambersburg: ANIMA Books.

Suksamran, Somboon.: 1982 *Buddhism and Politics in Thailand*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.

Tambiah, S. J.: 1970 *The Buddhist Saints of the Forest and the Cult of Amulets*, Cambridge: Cambridge University Press.

Taylor, J. L.: 1990 "New Buddhist Movements in Thailand: An 'Individualistic Revolution', Reform and Political Dissonance", *Journal of Southeast Asian Studies*, 21 (1).

（2009年11月10日　受付
2009年12月21日　受理）